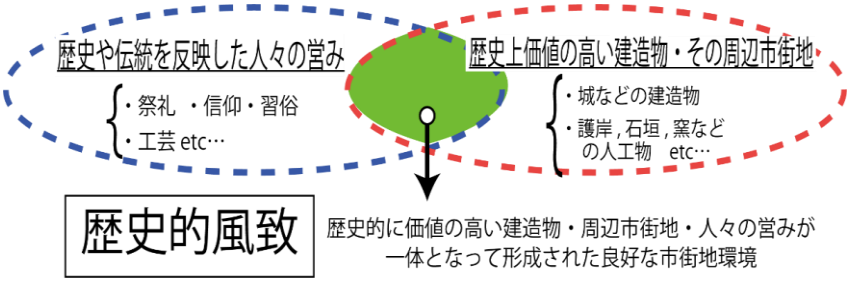
第２章　北中城村の維持向上すべき歴史的風致について

１．北中城村の歴史的風致の概要・分布状況

本計画の主たる目的は、地域の健全な発展と文化の向上に寄与するため、「歴史的風致」の維持・向上を図ることにある。「歴史的風致」とは、平成20年に施行された「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（歴史まちづくり法）」第一条において、次のように定義されている。

歴史まちづくり法：（第一条）地域におけるその**固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動**とその**活動が行われる歴史上価値の高い建造物**及びその**周辺の市街地**とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境



北中城村では、主に村南部において中城（なかぐすく）城跡をはじめとする複数のグスク※1が分布しており、グスクが関わる祭礼や、グスクを背景とした地域固有の活動が執り行われている。

また、本村には地域ごとの祭祀や民俗芸能が多く伝えられており、それらの活動には、それぞれ価値ある歴史的建造物との関連性がある。

これらの状況を踏まえ、本村の歴史的風致を次の三点に整理する。

１　古城周辺にみる歴史的風致

①グスクと祭祀活動にみる歴史的風致　②大城集落の修景・緑化推進活動にみる歴史的風致
③古城周辺の周遊にみる歴史的風致

２　地域の祭祀にみる歴史的風致

①祖先祭祀にみる歴史的風致　②ウマチーにみる歴史的風致　③綱引きにみる歴史的風致
④カシチー・ウハチにみる歴史的風致　⑤ハタスガシーにみる歴史的風致

３　地域の民俗芸能の継承にみる歴史的風致

※1 グスク：琉球列島に分布する遺跡で、総数は340箇所を超える。グスク時代には城塞として発達し、役割を終えたグスクが村落の聖域として存続する場合もある。

■北中城村歴史的風致の体系図

＜風致1＞

		建物とまちなみ	営み
古城周辺にみる歴史的風致	①グスクと祭祀活動にみる歴史的風致	祭祀活動が行われる建造物 ●中城城跡　●安谷屋グスク ●根所火の神　●グスクの七殿 ●中城若松の墓	●中城城跡と六月ウマチー ●安谷屋グスクとウマチー ●安谷屋グスクとカシチー
	②大城集落の修景・緑化推進活動にみる歴史的風致	花咲爺会の修景・緑化活動とかかわる建造物 ●中城城跡　●大城グスク ●中村家住宅	●花咲爺会の緑化推進活動
	③古城周辺の周遊にみる歴史的風致	安谷屋集落周辺の周遊活動が行われる周辺の建造物 ●安谷屋グスク	●安谷屋集落周辺の「あるけあるけ大会」の活動

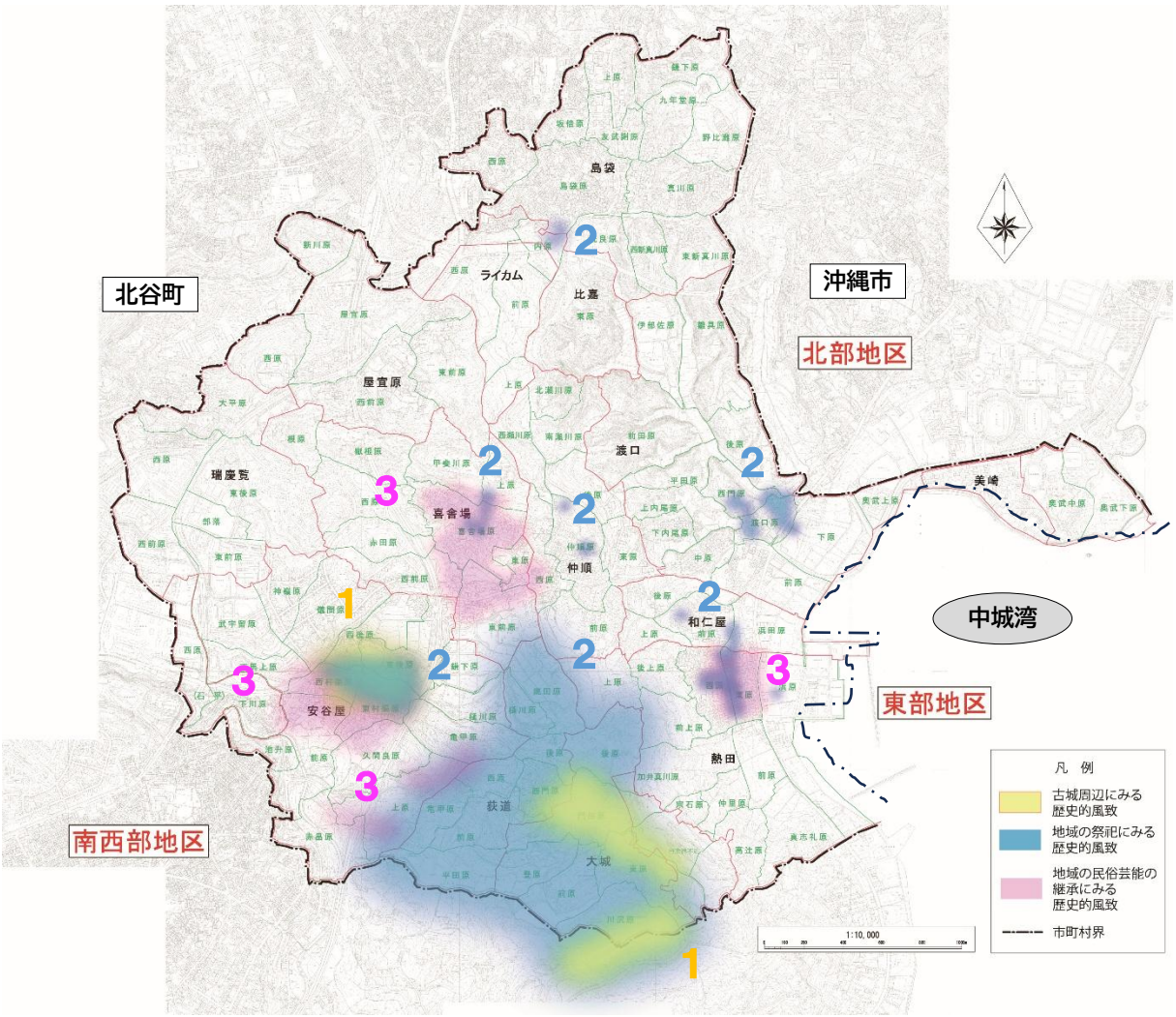
＜風致2＞

		建物とまちなみ	営み
地域の祭祀にみる歴史的風致	①祖先祭祀にみる歴史的風致	祖先祭祀とかかわる建造物（喜舎場・仲順） ●喜舎場公の墓●仲順大主之墓 ●お宮	●喜舎場公例祭 ●仲順大主例祭 ●字シーミー
	②ウマチーにみる歴史的風致	ウマチーとかかわる建造物 【渡口】●渡口の殿●和仁屋間のテラ ●渡口洞穴遺跡 【仲順】●お宮 【比嘉】●ヒジャヌトゥン●カニマン御嶽 【熱田】●島根殿 【和仁屋】●イーヌウタキ 【安谷屋】●根所火の神●グスクの七殿	●ウマチー
	③綱引きにみる歴史的風致	綱引きとかかわる建造物 【熱田】●島根殿 【荻道】●荻道のヒージャーガー 【安谷屋】●安谷屋グスク●根所火の神 ●グスクの七殿●中城若松の墓	●綱引きの活動
	④カシチー・ウハチにみる歴史的風致	カシチー・ウハチにかかわる建造物 【熱田】●島根殿●和仁屋間のテラ 【安谷屋】●安谷屋グスク●根所火の神 ●グスクの七殿●中城若松の墓	●カシチー・ウハチ
	⑤ハタスガシーにみる歴史的風致	ハタスガシーにかかわる建造物 ●喜友名根所　●久知屋根所 ●荻道のヒージャーガー	●ハタスガシー

＜風致3＞

		建物とまちなみ	営み
地域の民俗芸能の継承にみる歴史的風致	エイサーにみる歴史的風致	<u>エイサーの巡行とかかわる建造物</u> 【安谷屋】●根所火の神●安谷屋グスク 【熱田】●島根殿 【喜舎場】●喜舎場公の墓	●安谷屋のエイサー ●熱田のエイサー ●喜舎場のエイサー

■北中城村歴史的風致の分布状況



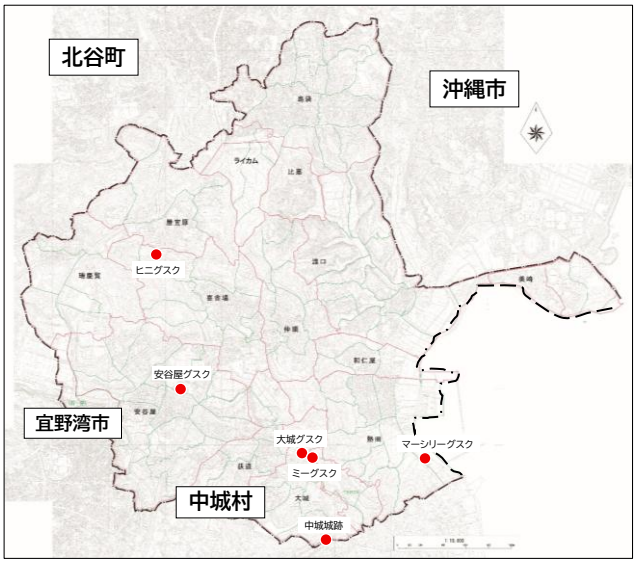
2．歴史的風致の内容

（1）古城周辺にみる歴史的風致

はじめに

北中城村内には六つのグスクが分布しており、そのうち村南部の大城（おおぐすく）・荻道（おぎどう）・安谷屋（あだにや）地区には、四つのグスクが所在している。中城村と接する大城地区には中城（なかぐすく）城跡、大城・荻道地区の北側の丘陵に大城（おおぐすく）グスク、大城グスクと隣り合う丘陵にミーグスク、さらに安谷屋地区北側の丘陵には安谷屋（あだにや）グスクがある。

■グスクの配置図



それぞれのグスクでは、地域の人々に祭祀で拝される御嶽（ウタキ）や井泉（せいせん）が聖域として残されており、儀礼的な地域活動が現代まで継承されている。また、グスクそのものが地域の重要な歴史文化資源として親しまれ、グスクを背後に形成される伝統的な集落景観の中で、地域住民が多様な生活文化を営んでいる。

●琉球列島における「グスク」の成立過程

琉球列島においては、考古学的資料の出土状況から、概（おおむ）ね11世紀頃には狩猟・採取社会から農耕社会への移行がなされていったと考えられている。その後の鉄製農具の出現や農耕の技術的進歩に伴って生産力が向上すると、農耕活動を基盤としていた原始の共同体が“集落”となり、その過程において集団を統率する首長的立場として「按司（あじ）※2」が台頭するようになったとされる。

本格的な農耕生産の開始以降、琉球列島各地にグスクと呼ばれる遺跡が出現するようになる。グスクの多くが丘陵地に築かれており、石墨（せきるい）や土墨（どるい）で囲まれた形状から城塞（じょうさい）としての役割を持つという説や、生活の痕跡を示す出土品が多いことから防御集落とする説、近世村落の拝所（御嶽）となっていることが多い点から聖域とする説などがある。

県内には離島も含め300余りのグスク及び関連資産が現存しているが、それらの中には廃城後も、村落の聖域として現在も周辺地域の人々と生活に根強い関わりをもつものが多く残されている。

※2 按司：城を構えて地方を支配・統率していた政治的支配者を指す身分

●グスクと伝統的な集落形態

沖縄の伝統的な集落の特徴として、丘陵地を背にしてその南側斜面地や麓周辺に農地や住宅が配置される構造が多くみられる。この丘陵地を方言で「クサテ・クシャティ（腰当）」と呼び、集落や農地を守るようにクサテの森が広がっている。この森は台風や北風から集落を保護する役割を担うとともに、その内部の集落を見守る位置に拝所が設置されている。

グスクも同様に丘陵上に築かれることが多くあり、その下方に集落が形成されることから、伝統的な集落景観においては、クサテの森の中に位置するグスクが集落を背後から見守るように鎮座している構造が見て取れる。

■北中城村南部と中城城跡（南から）

①グスクと祭祀活動にみる歴史的風致

ａ）グスクと祭祀活動の関わりについて

村南部に分布する中城城跡・大城グスク・安谷屋グスクは、古くから集落の人々にとって聖域として位置付けられてきた。これらのグスク内部には御嶽や拝所が点在し、それらを拝する祭祀が現在に至るまで受け継がれている。

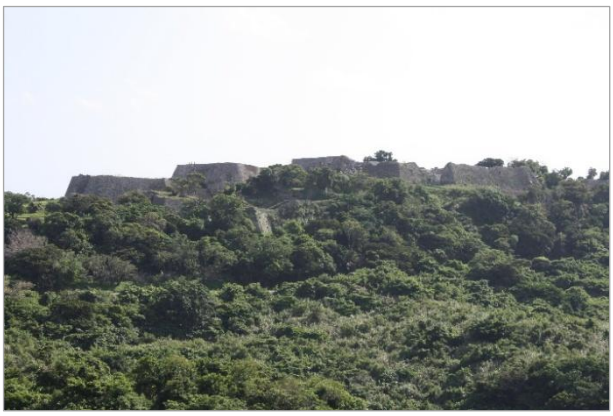
祭祀の多くは、時代とともにその執り行い方や担い手に変化がみられるものの、地域住民が主体となって活動が継承されてきた。これらのグスクを核とする祭祀活動について、以下に示す。

ｂ）建造物等

＜歴史的風致を形成する建造物＞

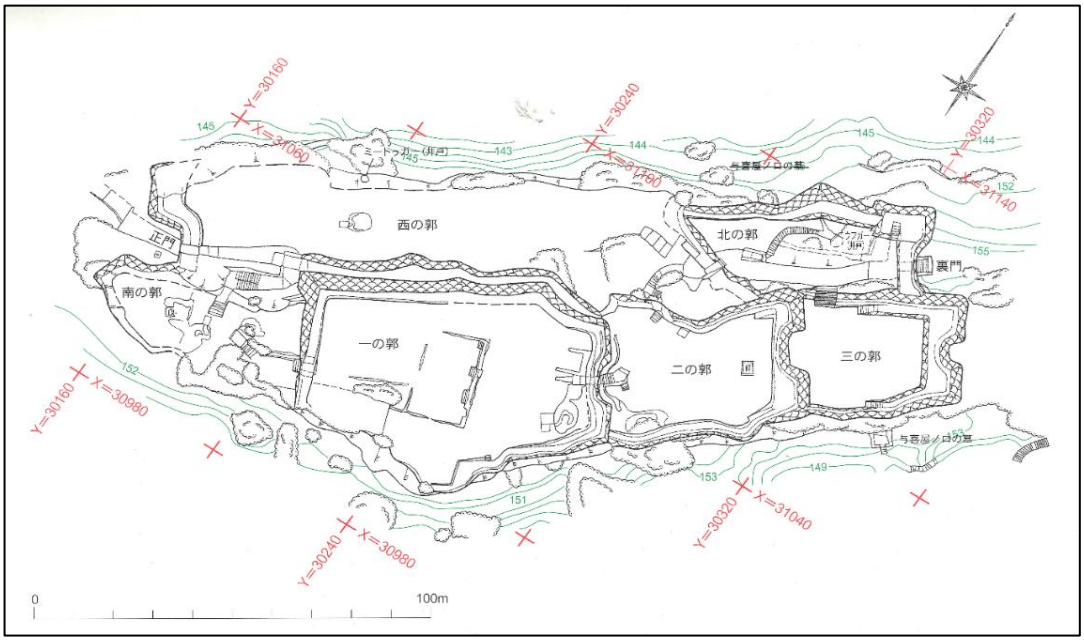
●中城城跡

中城（なかぐすく）城跡は、北中城村南部の大城地区及び中城村北部の泊（とまり）地区を跨（また）ぎ、標高 160m程の石灰岩丘陵上に立地する山城（やまじろ）である。兵馬の訓練をしたといわれ正門に続く「西の郭」、聖域の性格が強くみられる「南の郭」、敷地中央部の最高所、主殿が建っていたと考えられる「一の郭」とそこから続く「二の郭」、護佐丸が増築したとされる「三の郭」、岩陰に自然湧水の井戸を設え裏門と繋がる「北の郭」の六つの郭で構成されている。



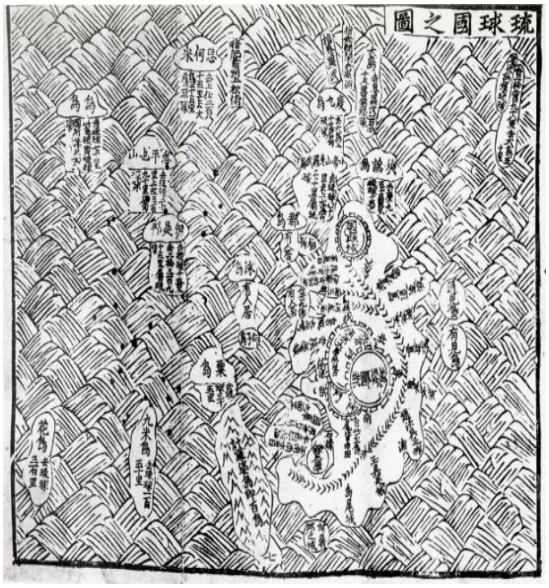
■中城城跡　遠景

■中城城跡平面図（『中城村の文化財　第４集　中城城跡』より転載（中城村教育委員会））



正確な築城年は不詳だが、中城村教育委員会が実施した遺構調査による出土遺物や放射性炭素年代測定により、14世紀後半頃に築かれたものと考えられている。

また、成化７年(1471)に李氏朝鮮王の命を受けた当時の領議政※3・申叔舟が日本本国・九州・壱岐対馬・琉球国の地勢・国情等について編纂した漢文書『海東諸国記』の中に収録されている『琉球国之図』において、中城城を指しているものと推察される「中具足城」の記述がみられる。



■海東諸国記琉球国図
那覇市歴史博物館 提供

築城に至るまでの詳細な経緯や歴史は不明な点が多いが、伝承では14世紀頃にこの地域を治めていた人物・先中城按司が数世代に渡ってグスクの大部分を築き、先述の通り15世紀中期に移封された護佐丸によって増築が行われたとされている。この点について、城壁の石積手法が一の郭・二の郭は野面積みと布積み、三の郭・北の郭は相方積みと異なった技法が用いられており、築城年代の差であると考えられている。

■左：布積み　　右：相方積み

「布積み」は、方形に加工した石材を規則的に並べた積み上げ手法。目地が揃っているため、強度が高くない欠点がある。
「相方積み」は、多角形に加工した石材を、互いに噛みあうよう積み上げた手法。強度と耐久性に富んでおり、布積みより比較的新しい技法とされる。
（中城城跡 HP より転載　協力：中城城跡共同管理協議会）

中城城跡は、昭和47年(1972)に沖縄県の本土復帰に伴って国の史跡に指定され、平成12年(2000)には『琉球王国のグスク及び関連遺産群』の九つある構成資産の一つとして世界遺産に登録された。

※3 領議政：朝鮮王朝における行政機関の最高位の官職

●安谷屋グスク

北中城村南東部の安谷屋地区に所在する遺跡で、集落北側の丘陵上に位置する。グスク北西側には石段があり、そこがグスクへの入口だと考えられている。さらに南側の崖下からは土器や外国産陶磁器等が採取されており、これら遺物の状況から、グスク時代(12～16世紀頃)の遺跡と推定されている。

■安谷屋グスク　全景

グスク内には複数の拝所が存在し、グスク全体が聖地とみなされている。康熙(こうき)52年(1713)に成立した琉球王府編纂(へんさん)の地誌『琉球国由来記(りゅうきゅうこくゆらいき)』(以下、『由来記』)には、グスク内の拝所の一つが「安谷屋城嶽(あだにやグスクダキ)」として記録されている。現在も安谷屋のウマチーやカシチーなどの、集落の祭祀において、自治会長を中心に地域住民がグスク内の拝所を巡拝している。

また、グスク西側の若松公園内の丘陵には、その名称の由来となった「中城若松(なかぐすくわかまつ)の墓」及び「屋敷の火の神跡」が所在している。伝承によれば、中城若松はかつて安谷屋グスクの城主であり、玉城朝薫(たまぐすくちょうくん)創作の組踊『執心鐘入(しゅうしんかねいり)』に登場する人物のモチーフとされる。公園内には若松の銅像や、若松を称える歌碑「おもろの碑」が設置され、その顕彰(けんしょう)が行われている。『執心鐘入』は村まつりで上演されるなど、安谷屋のみならず村民全体にその歴史と伝承が広く親しまれている。

●根所火の神

安谷屋グスク南東側の麓に所在する琉球石灰岩の祠(ほこら)で、内部には石と香炉を安置して火の神として祀っている。根所(ニードゥクル)とは村落の発祥に関わる家のことを指し、根屋(ニーヤ)ともいう。

■根所火の神　外観

康熙(こうき)52年(1713)に成立した琉球王府編纂の地誌『由来記』には、安谷屋村の拝所として「中之根所(ニードゥクル)」という記録があり、これが現在の根所火の神(ニードゥクルヒヌカン)に相当するとされている。

●グスクの七殿

安谷屋グスク頂上付近に所在する拝所で、二基の石碑が建立されており、右側の石碑には「ウミキ神」、左側の石碑には「ウミナイ神」と刻まれている。石碑の側面や裏面には「ナーカ門中（ムンチュー）」と刻まれており、屋号・仲（ナーカ）の門中※4が設置したものと考えられている。拝所の名称や位置などから、『由来記』に記録された安谷屋村の拝所「安谷屋城之殿（あだにやグスクノトゥン）」に相当するとされる。

■グスクの七殿　二基の石碑

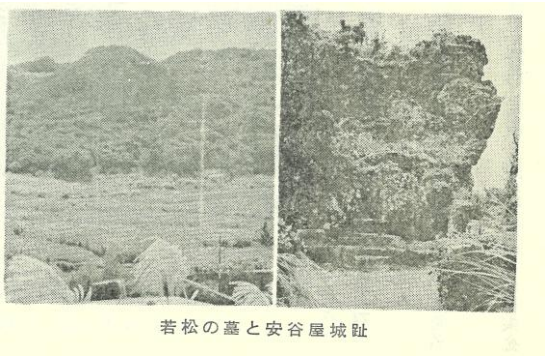
●中城若松の墓

安谷屋グスクと若松公園を挟んで隣り合う丘陵、通称ユナフヴンの頂上に位置する墓。ウマチーで直接拝礼する場所ではないが、祭祀の中で丘陵を背後に臨むように巡拝が行われる。

遠目には丘陵上の木々しか見えないが、その頂上に切り石を積んで囲んだ墓庭と、セメント製の祠が設置されている。由緒は不明であるものの、昭和45年(1970)に発刊された『北中城村史』（以下、『村史』）には刊行当時の写真が残されていることから、それ以前には既に建造されていたことが推定される。

中城若松は「安谷屋の若松」ともいい、琉球王国第二尚氏王統の始祖・尚円王と安谷屋ノロの間に生まれた子供とする伝承がある。安谷屋城主となり、死後は故郷の安谷屋に葬られたと伝えられる。若松については、沖縄最古の歌謡集『おもろさうし』でも謡われている他、玉城朝薫（たまぐすくちょうくん）の組踊

■安谷屋遠景
（白く囲われた箇所が安谷屋グスク、赤く囲われた箇所が中城若松の墓が立地する丘陵ユナフヴン）



■村史（昭和 45 年発刊）掲載の中城若松の墓

※4 門中：始祖を同じくする父系血縁の親族集団

『執心鐘入（しゅうしんかねいり）』の登場人物のモチーフになったともいわれている。

カシチーにおいては若松にゆかりのある仲家が拝礼している。

■中城若松の墓　正面

＜その他の建造物＞

本計画において、「グスクと祭祀活動にみる歴史的風致」の形成を担っている建造物として位置付けてはいないものの、北中城村らしい歴史的景観を形成する建造物等を抜粋して記載する。

安谷屋ウマチーで巡拝される建造物	仲（ナーカ）の神屋（カミヤー）		安谷屋地区に所在する旧家で、集落の草分けである「仲」の神屋（祖霊や火の神などを祀った建物）。 村落祭祀の中心的な存在であるが、正確な建築・建替年代は不詳。 ウマチーにおいては最初に拝される。
	イーヌウタキ		安谷屋地区に所在し、安谷屋グスクの頂上付近に位置する御嶽。平場の中央に石の香炉が置かれ、後方には人頭大～拳大の石灰岩礫が環状に配置されている。 ウマチーにおいては四番目に拝される。
	ウトゥーシ		安谷屋地区の安谷屋グスク内に所在する遥拝所。岩の前に石の香炉が二基安置されており、向かって右側が島尻方面（本島南部）、左側が今帰仁方面（本島北部）を遥拝するための香炉とされているが判然としない。 ウマチーにおいては五番目に拝される。
	シムヌウタキ		安谷屋地区に所在し、安谷屋グスクの北東麓に位置する御嶽。平場の中央に凝灰岩製の香炉が２基安置されている。 ウマチーにおいては六番目に拝される。
	邊土大主（ヘドゥウフスー）之墓		安谷屋地区に所在する墓。「邊土大主」は安谷屋の村建てを行った人物だとされる。 老朽化のため、平成７年(1995)に自治会によって建て替えが行われた。 ウマチーにおいては七番目に拝される。
	熱田の神屋（カミヤー）		安谷屋地区に所在する旧家「熱田」の神屋（祖霊や火の神などを祀った建物）。 正確な建築・建替年代は不詳。 ウマチーにおいては八番目に拝される。
	瑞慶覧ヌンドゥンチ跡		安谷屋地区に所在するノロの屋敷跡。現在、屋敷は撤去され、神屋だけが残っている。 正確な建築・建替年代は不詳。 ウマチーにおいては九番目に拝される。

	安谷屋ヌンドゥンチ		安谷屋地区に所在するノロの屋敷跡。敷地内には安谷屋・仲順・渡口地域の祭祀を管掌していた安谷屋ノロの住居と神屋がある。 正確な建築・建替年代は不詳。 ウマチーにおいては十番目に拝される。
安谷屋カシチーで巡拝される建造物	仲の神屋（ナーカ カミヤー）		安谷屋地区に所在する旧家で、集落の草分けである「仲」の神屋（祖霊や火の神などを祀った建物）。 村落祭司の中心的な存在であるが、正確な建築・建替年代は不詳。 カシチーにおいては最初に拝される。
	イーヌウタキ		安谷屋地区に所在し、安谷屋グスクの頂上付近に位置する御嶽。平場の中央に石の香炉が置かれ、後方には人頭大～拳大の石灰岩礫が環状に配置されている。 カシチーにおいては三番目に拝される。
	ウトゥーシ		安谷屋地区の安谷屋グスク内に所在する遥拝所。岩の前に石の香炉が二基安置されており、向かって右側が島尻、左側が今帰仁を遥拝するための香炉だとされているが判然としない。 カシチーにおいては四番目に拝される。
	シムヌウタキ		安谷屋地区に所在し、安谷屋グスクの北東麓に位置する御嶽。平場の中央に凝灰岩製の香炉が二基安置されている。 カシチーにおいては五番目に拝される。
	ティラグヮー山	 	安谷屋地区に所在する場所であり、「寺小山坊主墓」と刻まれた石碑が建っている。正確な設置年代は不詳。 カシチーにおいては六番目に拝される。
	邊土大主之墓（ヘー ドゥ ウフスー）		安谷屋地区に所在する墓。「邊土大主」は安谷屋の村建てを行った人物だとされる。 老朽化のため、平成７年(1995)に自治会によって建て替えが行われた。 カシチーにおいては八番目に拝される。
	熱田の神屋（カミヤー）		安谷屋地区に所在する旧家「熱田」の神屋（祖霊や火の神などを祀った建物）。 正確な建築・建替年代は不詳。 カシチーにおいては十番目に拝される。
	瑞慶覧ヌンドゥンチ跡		安谷屋地区に所在するノロの屋敷跡。現在、屋敷は撤去され、神屋だけが残っている。 正確な建築・建替年代は不詳。 カシチーにおいては十一番目に拝される。
	安谷屋ヌンドゥンチ		安谷屋地区に所在するノロの屋敷跡。敷地内には安谷屋・仲順・渡口地域の祭祀を管掌していた安谷屋ノロの住居と神屋がある。 正確な建築・建替年代は不詳。 カシチーにおいては十二番目に拝される。

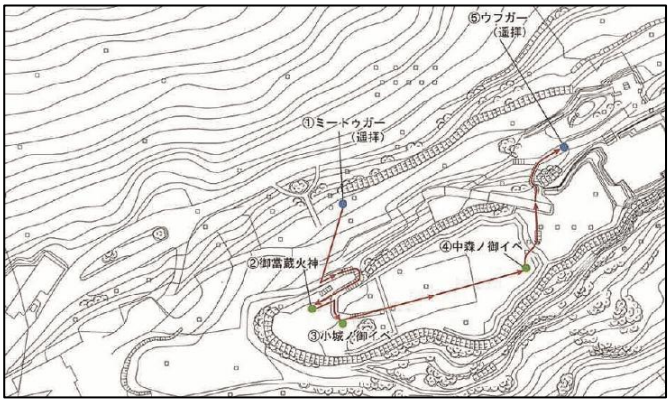
c）活動

活動１．中城城跡とかかわる祭祀活動（六月ウマチー）

発掘調査によって出土した遺物から、中城城跡は14世紀後半に築城したと推定されるグスクであり、雍正（ようせい）９年(1731)に成立した琉球国の地誌『琉球国旧記』によれば、当時座喜味（ざきみ）城主であった按司・護佐丸が王命を受け、15世紀中期に移り住み、城郭を拡張したと伝えられている。

この城跡は城塞としての機能に加え、聖地としての役割も担っており、城郭内には複数の拝所が点在する。毎年、祭祀の時節になると、祭祀に関わるノロの関係者らが、供物を携えて城跡内や周辺の拝所を巡拝する姿が確認される。その祭祀の一つが六月ウマチーである。

ウマチーとは沖縄諸島で稲麦（とうばく）にかかわる祭祀の一つであり、収穫への感謝と翌年の豊作を祈願するものである。康熙（こうき）52年(1713)に成立した琉球王府編纂の地誌『琉球国由来記』（以下、『由来記』）においては、中城城内の年中祭祀として「*稲二祭之時、花米九号完、五水八合完、神酒二完、シロマシ一器*～」（稲二祭の際に米・泡盛等の神饌（しんせん）を供える）と記されており、稲二祭とは稲穂の収穫祈願である五月ウマチーと収穫を祝う六月ウマチーの二つを示している。いずれも旧暦月の15日に執り行われる。



■城跡内の六月ウマチーの巡拝ルート
（沖縄県知事承認・沖縄県数値地形図複製
【令和６年６月21日付け・企情第325号】）

かつては中城村方面の集落を管轄していた女性祭司の一人・ヨキヤノロと周辺集落の百姓や地頭が祭祀に参加していたが、現在は中城村字添石（そえし）の屋号：ヌンドゥンチ（ノロ殿内）が中心となって祭祀を継承しており、祭祀当日には中城城跡を訪れた人々がその様子にふれることもある。

祭祀当日は城跡内の拝所（ミートゥガー・御當蔵火神（ウトゥクラヒヌカン）・小城ノ御（オ）イベ・ウフガー）を参加者が巡拝し、供物や火をつけない線香を供えて拝む。最後は中城村へ車で移動して、ノロの屋敷跡であるヌンドゥンチ内の祭壇を拝んでいる。

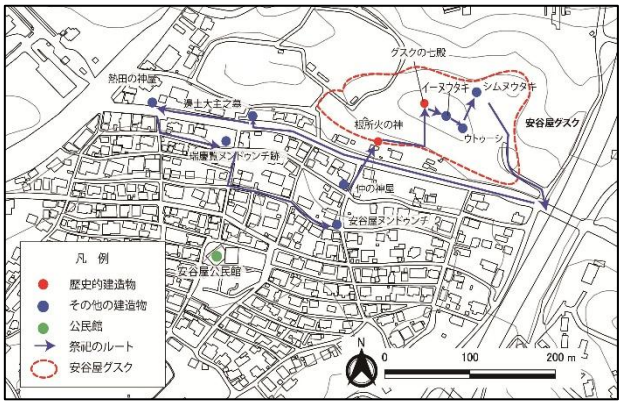
■石造の祠（御當蔵火神）を通して首里へ
遥拝する屋号：ヌンドゥンチの関係者

活動２．安谷屋グスクとかかわる祭祀活動

安谷屋グスクは、北中城村南西部の安谷屋地区に所在するグスクである。グスク内には御嶽（ウタキ）や井泉（せいせん）等の拝所が点在し、毎年祭祀の時期になると自治会役員を中心として地域住民がグスク内やその周辺の拝所を巡拝している様子を目にすることが出来る。

◆安谷屋グスクと安谷屋のウマチー

安谷屋のウマチー※5について、安谷屋地域では旧暦二月・五月・六月の15日に、年三回執り行われている。このうち、五月ウマチーと六月ウマチーについては、康熙（こうき）52年(1713)に成立した琉球王府編纂の地誌『由来記』に、安谷屋村の年中祭祀として「稲二祭」の記録が残されており、これが稲穂の収穫祈願である五月ウマチーと、収穫を祝う六月ウマチーの二つを指しているとされる。



■五月ウマチー・六月ウマチーの巡拝ルート

二つの祭祀の巡拝する拝所や手順はほぼ同一であり、自治会役員が中心となって執り行っている。当日は、集落の発祥に関わる旧家や屋敷跡、さらに安谷屋グスク内の拝所を、参加者がビンシー（供（く）物（もつ）を入れる携帯用の御願（ウガン）道具）を携えて巡拝する様子が確認できる。

■集落内の拝所（瑞慶覧ヌンドゥンチ）を拝む参加者の様子

【供物】

拝所や屋敷内の祭壇に供える供物は一定の形式が定められており、携帯用の御願道具であるビンシー（右図　木製箱）に収めて供えられる。

※5 ウマチー：沖縄諸島で稲麦にかかわる祭祀の一つであり、稲穂の収穫への感謝と翌年の豊作を祈願するもの

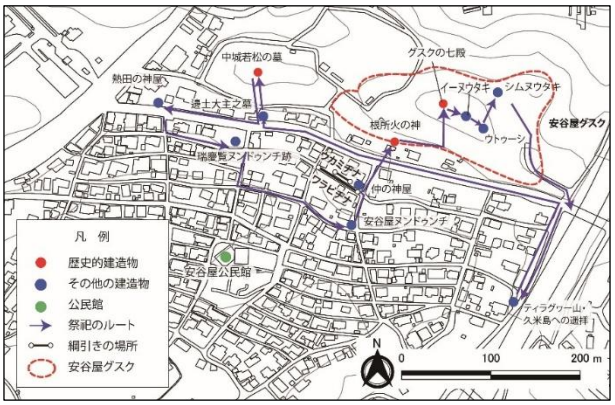
ビンシーは重箱状になっており、奥側の三つの仕切りには酒瓶二本と盃を、手前側の三つの仕切りには花米（神仏に供える生米）が入れられる。地域によっては、花米の上に硬貨を添える場合もある。

これに加え、ウンサク（神酒（みき））六杯が供えられる。かつては米・麦・粟などを発酵させたものを神酒として用いていたが、現在では市販の牛乳や乳酸菌飲料などを神酒として代用している。

供物を供える際には、一部の拝所で火をつけた線香が用いられ、その独特の香りが拝所周辺に漂う。

◆安谷屋グスクと安谷屋のカシチー

カシチーとは沖縄諸島で行われる稲の収穫に感謝する祭祀であり、同じく稲穂の収穫に感謝する「六月ウマチー」とよく似ているが、カシチーでは新米を供物として捧げたり、地域によっては綱引きが行われたりするなどの違いがある。また、ウマチーは旧暦15日に執り行われるのが一般的であるのに対し、カシチーは主に旧暦25日頃に行われる。



沖縄諸島では、旧暦６月と８月に実施される地域が多いが、北中城村安谷屋では旧暦６月25日頃に行われていることから、「六月カシチー」といわれている。安谷屋集落における自治会の特別な行事等に関する会計記録を記した『安谷屋区特別会計簿』には、昭和26年(1951)の７月28日（旧暦６月25日）にカシチーの祭祀が執り行われた記録が残されており、この祭祀が古くから地域に根付いていることがうかがえる。

■「仲の神屋」の火の神への拝礼

【拝所等の巡拝】

安谷屋の六月カシチーでは、自治会役員と、集落の草分けの家である屋号「仲」の女性が参加し、日中からビンシー（供物を入れる携帯用の御願道具）を携えて、集落内の拝所や旧家などを巡拝する。

■屋外での拝礼の際には、火をつけない線香（カラウコー）を供えることも多い

巡拝の対象は、安谷屋集落の草分けの家である仲の敷地にあり、祖霊などを祀る建物「神屋」をはじめ、根所火の神、イーヌウタキ、ウトゥーシ、シムヌウタキ、ティラグヮー山、久米島への遥拝の場所、邊土大主之墓（へどウフスー）、中城若松の墓、熱田（あった）の神屋、瑞慶覧（ずけらん）ヌンドゥンチ跡、安谷屋ヌンドゥンチの計十二か所である。

一部の拝所では線香を供え、漂う香煙の中で拝所に手を合わせる地域住民の姿を見ることが出来る。

【綱引き】

巡拝が終わると、参加者たちは再び仲の家の前に集合し、同家の前の通り（通称クシミチ）に集まった子供たちとともに綱引きの準備を行う。銅鑼（どら）を打ち鳴らしながら、仲の敷地を基点として縄を東西に配置する。また、仲の家の庭先には、クシミチに配置したものより短い縄を二本置く。クシミチに配置された縄で行う綱引きを「ワラビヂナ」、仲の家の庭先で行う綱引きを「ウカミヂナ」という。

■仲家の倉庫からワラビヂナを運び、クシミチに配置する子供たちの様子

縄を準備している間、仲の神屋では綱引きを行うことを報告する拝みが行われ、ゆで卵や「ウブク」と呼ばれる赤飯を円錐形に盛った湯呑が供物として捧げられる。拝みが終わると、まず仲の家の庭先でウカミヂナが行われる。祭祀のために集まった地域住民が庭先に集まり、自治会長が中心となって祭祀や綱引きについて説明を行う。

■ウブク

綱を引く前には、「ワカチボー」と呼ばれる四尺棒の打ち合いが行われる。安谷屋地区の東側と西側からそれぞれ男性一名が選ばれ、銅鑼の音と掛け声に合わせて棒を数回打ち合わせる。この際、適当な参加者が居ない場合は、自治会役員が代わって務める。仲家の血筋にあたる男性が六尺棒を持って間に入り、打ち合いを止める。

■ウカミヂナ

打ち合いを終えると、短い二本の縄の頭をつないだウカミヂナを用い、銅鑼の音と「ハルエイ」という掛け声に合わせて綱引きが行われる。ウカミヂナでは、あえて東側が勝つ決まりとなっており、これにより豊年や幸福を意味する「ユガフ（世界報）」がもたらされるという。

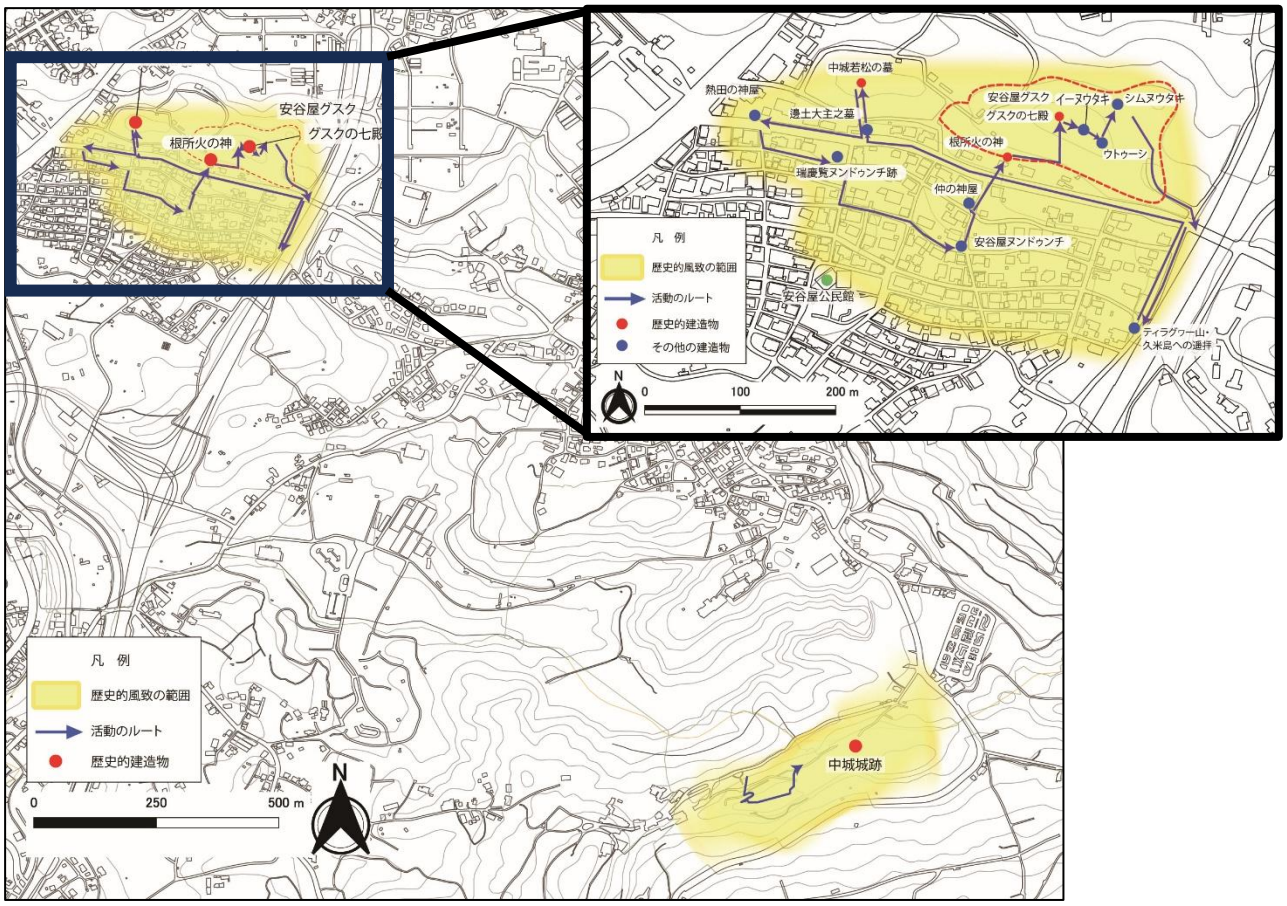
■四尺棒を打ち合う東西代表の男性二人と、六尺棒で打ち合いを止める仲家の血筋にあたる男性

ウカミヂナを終えると、自治会長の呼びかけで地域住民はクシミチに移動し、自身の住む区域に応じて東西に分かれ、ワラビヂナが行われる。綱を引く前にはウカミヂナと同様に棒の打ち合いが行われる。それを終えると、まず綱を西側にゆっくりと引き、次に東側へ引き戻し、再び綱の中心が元の位置に戻ると、自治会長の号砲（スターターピストル）の合図で綱引きが開始される。綱引きが終わると、参加した子供たちには菓子が振る舞われ、子供たちの賑わいの中で祭祀が締めくくられる。

d）グスクと祭祀活動のまとめ

グスクとその周辺における御嶽や拝所を巡る祭祀は、担い手や執り行い方に変化を伴いながらも、地域住民を主体として現在まで受け継がれてきた。その厳かな風情や賑わいが、地域固有の歴史的風致を形成している。

◆グスクと祭祀活動にみる歴史的風致図



②大城集落の修景・緑化推進活動にみる歴史的風致

ａ）大城集落の修景・緑化推進活動について

北中城村では昭和33年(1958)頃より国民運動の一環として緑化推進が図られ、特に中城城跡城下の荻道・大城地区では歴史的景観の保全・修景が重点的に取り組まれることとなった。

こうした流れの中で、現在では、地域住民が主体となって大城地区のまちづくりと景観美化に取り組む「大城花咲爺会」が結成されるなど、集落の修景・緑化推進に取り組む活動が活発に行われている。

ｂ）建造物等

●大城グスク

北中城村南部の大城地区と荻道地区に跨って所在する遺跡で、標高150～165ｍの琉球石灰岩丘陵上にあり、村内で最も高い地点にあたる。建造物としては敷地北側の一部に石積みがわずかに残るのみであり、その他の構造物は戦時中、日本軍が陣地構築の石材に利用するため取り壊され、その後も平成初期頃からの断続的な開発に伴い採石などが行われた。

■大城グスク　全景

昭和55年(1980)前後に行われた県の実地踏査では、敷地内からフェンサ上層式土器片や青磁片などが採取されており、14世紀頃の遺跡と推定されている（『沖縄グスク分布調査報告書』昭和58年(1983)）。

大城グスクから世界遺産中城城跡へ至る県道146号線を中心に、花咲爺会の景観美化・維持管理活動が行われている。

■大城グスクの石積み

●中村家住宅

大城花咲爺会の活動地点である大城地区に所在する重要文化財。正確な建築年代は不詳だが、19世紀初期と推定される。首里にあった士族屋敷を買い取って移築したと伝えられている。昭和47年(1972)に国の重

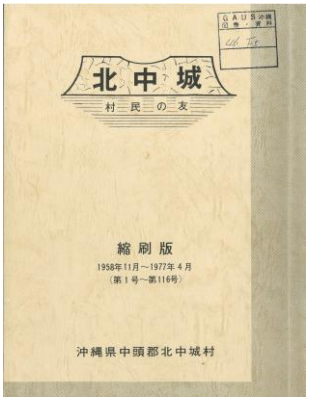
要文化財に指定された。

屋敷は南向けの緩い傾斜地を切り開いて建てられ、良質な木材が使用された瓦葺きの主屋（ウフヤ）とあさぎ（離れ座敷）のほか、農家の形式である籾蔵（もみぐら）や前の屋（メーヌヤ）（畜舎）などが付随しており、屋敷全体は琉球石灰岩の石垣で囲われている。

花と緑に囲まれた芸術の里づくりをコンセプトに大城地区で開催されるスージグヮー週末美術館では、住宅前の風情ある石垣を活用し、造形作品の展示などが行われている。

c）活動

北中城村全域での緑化推進が図られるようになったのは、昭和33年(1958)に琉球政府が国民運動の一環として緑化運動を提唱したことに始まる。同年頃の村広報誌『村民の友』には、「政府のこの運動を提携協力致しまして近く村緑化支部を構成し、村内の緑化運動に村民の知慧を集めて邁進（まいしん）して行き度い」（第２号：昭和33年(1958)12月）や「村の立地条件に適した果樹が各宅地に植えつけられるように」（第３号：昭和34年(1959)１月）と記されており、当時、村民に緑化活動への協力が呼びかけられていたことがうかがえる。その後、ミカンの台木などが各戸に配布されるなど、住戸単位での緑化活動が展開され、家庭や地域単位での植栽の取り組みが推進されていった。



■村広報誌『村民の友』（縮刷版：発行昭和52年(1977)）

昭和62年(1987)には、沖縄の本土復帰15周年記念事業として「第42回国民体育大会」が県内で開催されたのに合わせ、北中城村でも「景観美化促進運動」が展開され、地域の景観向上を目指す取り組みが一層活発となった。更に、平成６年(1994)には中城城跡城下である大城・荻道地区を対象とした歴史的景観の保全・整備事業として、「古城周辺歴史的景観整備事業」が実施された。

こうした流れを受けて、大城集落周辺では、地域住民が主体となり、公民館周辺や道路沿いの壁面に樹木や草花を植栽して景観を整える活動が見られるようになった。その取り組みが発展し、地域の景観美化と大城地区のまちづくりを推進するボランティア団体として平成11年(1999)に「大城花咲爺会（おおぐすくはなさかじじいかい）」が結成されたという（「沖縄本島における地域づくりに関する研究」谷澤 明（たにざわ あきら）『現代社会研究科研究報告』第３号(平成20年(2008))。

■県道146号線周辺の景観維持管理活動に取り組む花咲爺会

大城花咲爺会の活動は、大城地区全域を対象に、地域の緑化推進運動や環境美化作業を行っている。中城城跡や大城グスクを臨む県道146号線沿いの植栽を整えるとともに、シーサーなどの造形作品を配置して沖縄らしい風情ある散歩道づくりに努めている。また、中村家住宅や地域の家屋、路地（方言でスージグヮー）を“野外美術館”に見立て、地域住民が作成した制作物（一輪挿しや素焼き造形物、写真など）を展示する「スージグヮー週末美術館」や、公民館広場でエイサーや楽器演奏を披露する「ムーンライトコンサート」などの文化的催しを通した花と緑に囲まれた芸術の里づくりを見てとることができる。

■その他の活動

●大城グスクと荻道の字シーミー

字シーミーとは、清明節において集落の聖地や集落の成り立ちに関わった人物の墓参りをし、祖先を供養する祭祀である。荻道集落では、自治会役員や有志によって執り行われており、大城グスク内や集落内の拝所を巡拝している。

■集落内の拝所（チブガー）を拝む参加者

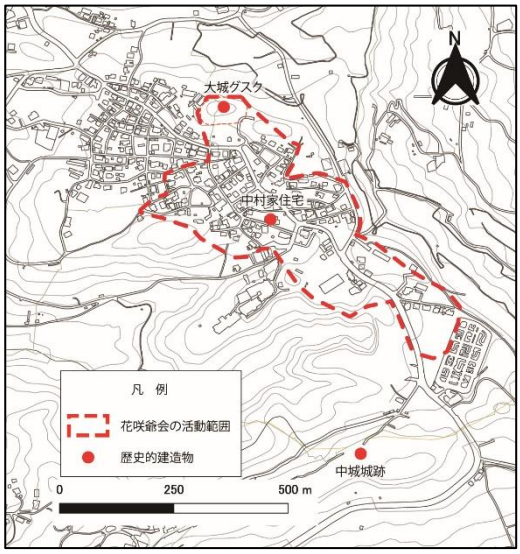
●大城グスクと大城のハチウクシー

ハチウクシーとは年頭に仕事を行う仕事始めの儀礼のことをいい、大城集落では新暦１月３日に執り行われている。自治会役員や有志が大城グスク内や集落内の拝所を巡拝している。

■グスク内の拝所（大城御嶽）を拝む参加者

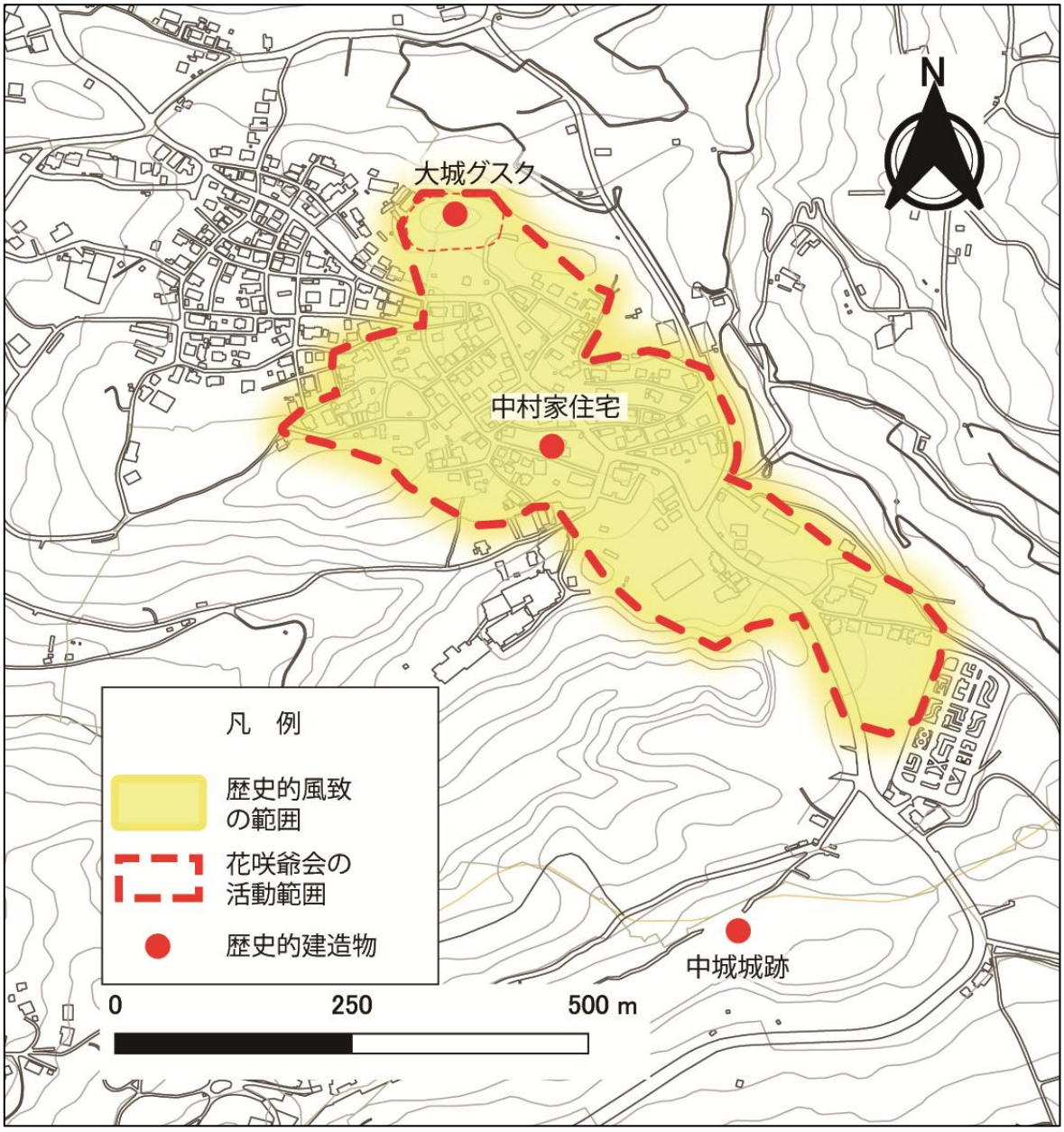
d）大城集落の修景・緑化推進活動のまとめ

大城集落周辺では、戦後の緑化推進運動や景観美化の流れを受け、地域住民が主体となって修景・緑化に取り組む活動が継続して行われてきた。中城城跡や大城グスク、中村家住宅などの周辺における日常的な景観美化活動や、展開される文化的催しの賑わいが地域固有の歴史的風致を形成している。

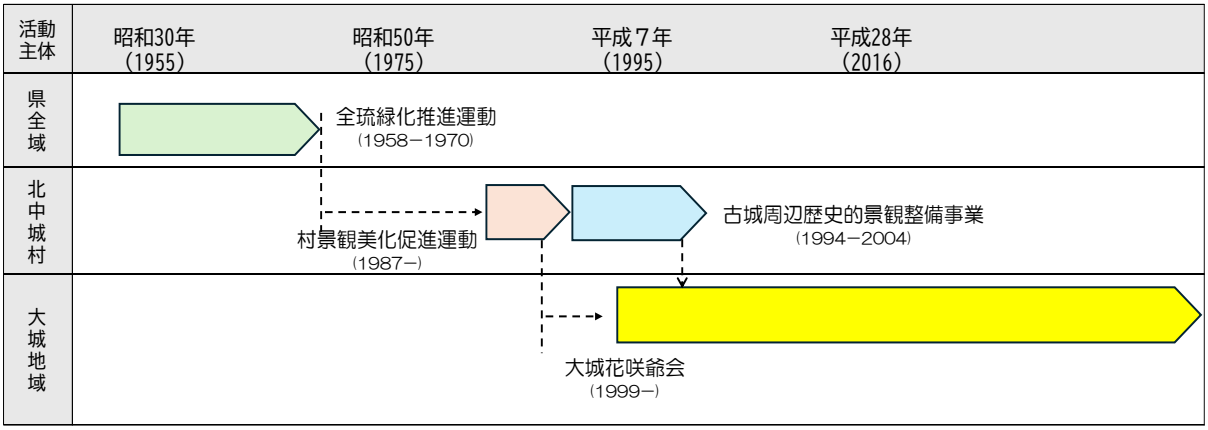


■花咲爺会の活動範囲

◆大城集落の修景・緑化推進活動にみる歴史的風致図



■大城の修景・緑化推進にまつわる活動年表



③古城周辺の周遊にみる歴史的風致

ａ）古城周辺の周遊について

北中城村で「歩け歩け運動」と呼ばれる地域活動が最初に始まったのは、昭和50年(1975)の島袋区の教育隣組による呼びかけがきっかけである。教育隣組とは、家庭学習の充実や児童福祉の推進などを目的に、戦後の沖縄で婦人会などを中心に各地で結成された地域組織である。

■島袋区教育隣組による「歩け歩け運動」の様子
（村広報誌第９１号／昭和５０年４月）

村広報誌『村民の友』によれば、昭和50年(1975)３月末には島袋区民が公民館に集い、健康増進や住民同士の交流を図る目的で、子供から高齢者まで多くの参加者が区内を中心に村内約12kmの行程を練り歩いた様子が記録されている（第91号：昭和50年(1975)４月)。この取り組みはやがて村内各区へと広がり、昭和61年(1986)には「村民あるけあるけ大会」として全村的な催しとなった。当日は、住民が各区の公民館に集合し、区ごとに設定されたコースを歩きながら、地域への愛着を深めつつ健康づくりに取り組んでいたとされる。この大会は、平成７年(1995)の第10回大会まで続けられた。

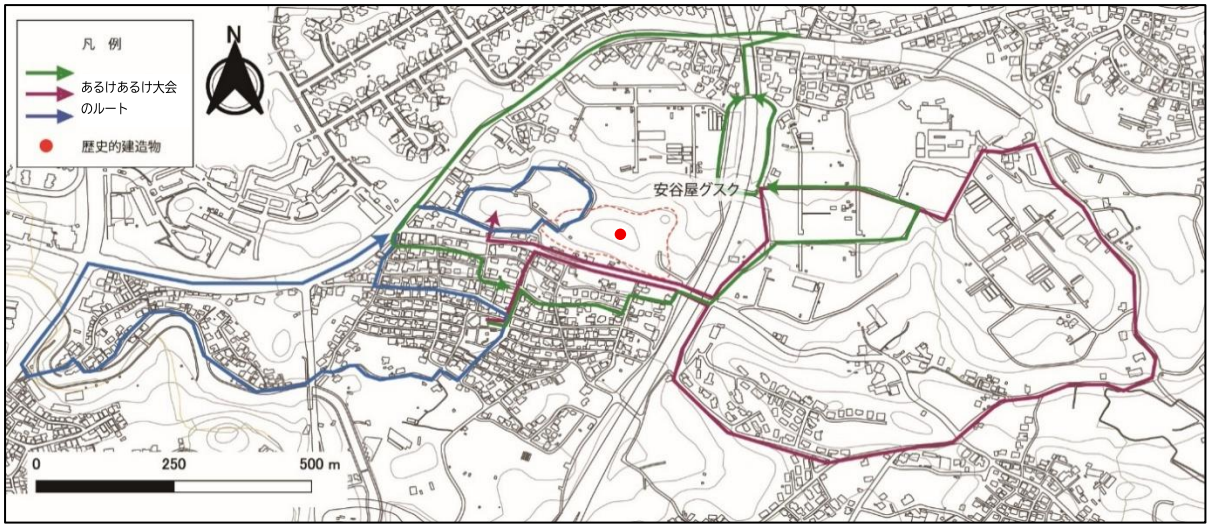
ｂ）建造物等

●安谷屋グスク（再掲）

安谷屋地区に所在する遺跡。「あるけあるけ大会」の順路は毎年度自治会が検討し設定するため年によって異なるが、いずれのルートにおいても、集落を見下ろす丘陵に位置する安谷屋グスクと、その裾野から広がる緑地を背景に活動が行われている。

ｃ）活動

平成８年(1996)以降、村全体での「あるけあるけ大会」の開催は行われなくなり、一部の地区が散発的に実施する取り組みとなったが、安谷屋地区では継続的に歩け歩け運動が受け継がれ、現在まで根強く開催されている。設定されるコースは年ごとに異なるものの、いずれも安谷屋グスクを背景に、地域ゆかりの場所や緑豊かな集落景観を巡りながら、健康増進とともに地域の姿に親しむことのできる順路となっている。安谷屋グスクの丘陵がもたらす緑地の豊かさを感じ取りながら安谷屋地域を歩く参加者の姿は、地域に賑わいをもたらしている。



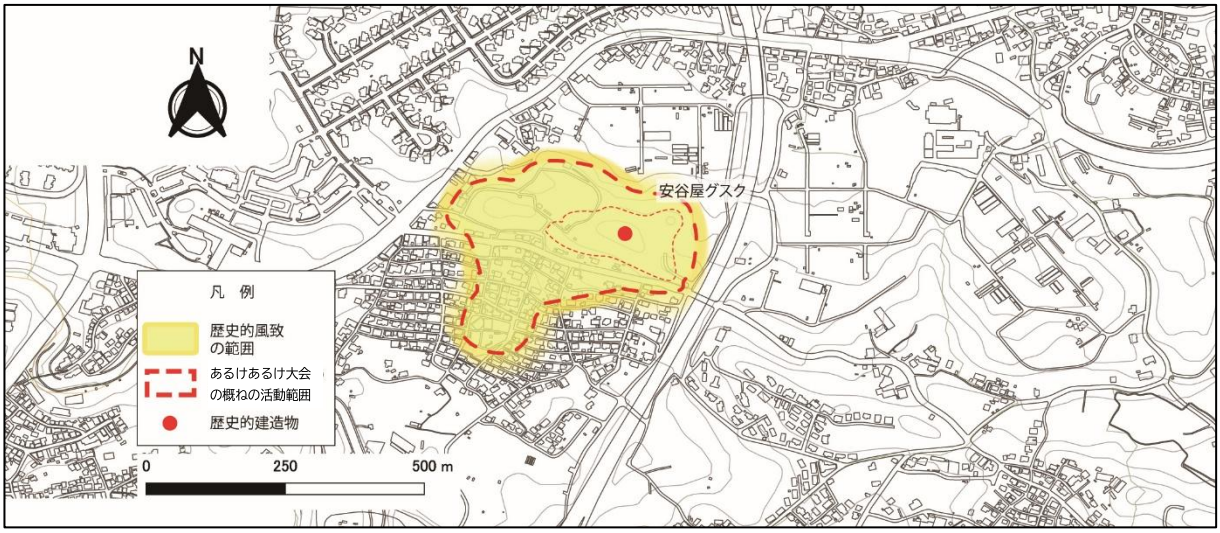
■過去の「あるけあるけ大会」のコース例（年度によって経路・ゴールを調整）

d）古城周辺の周遊のまとめ

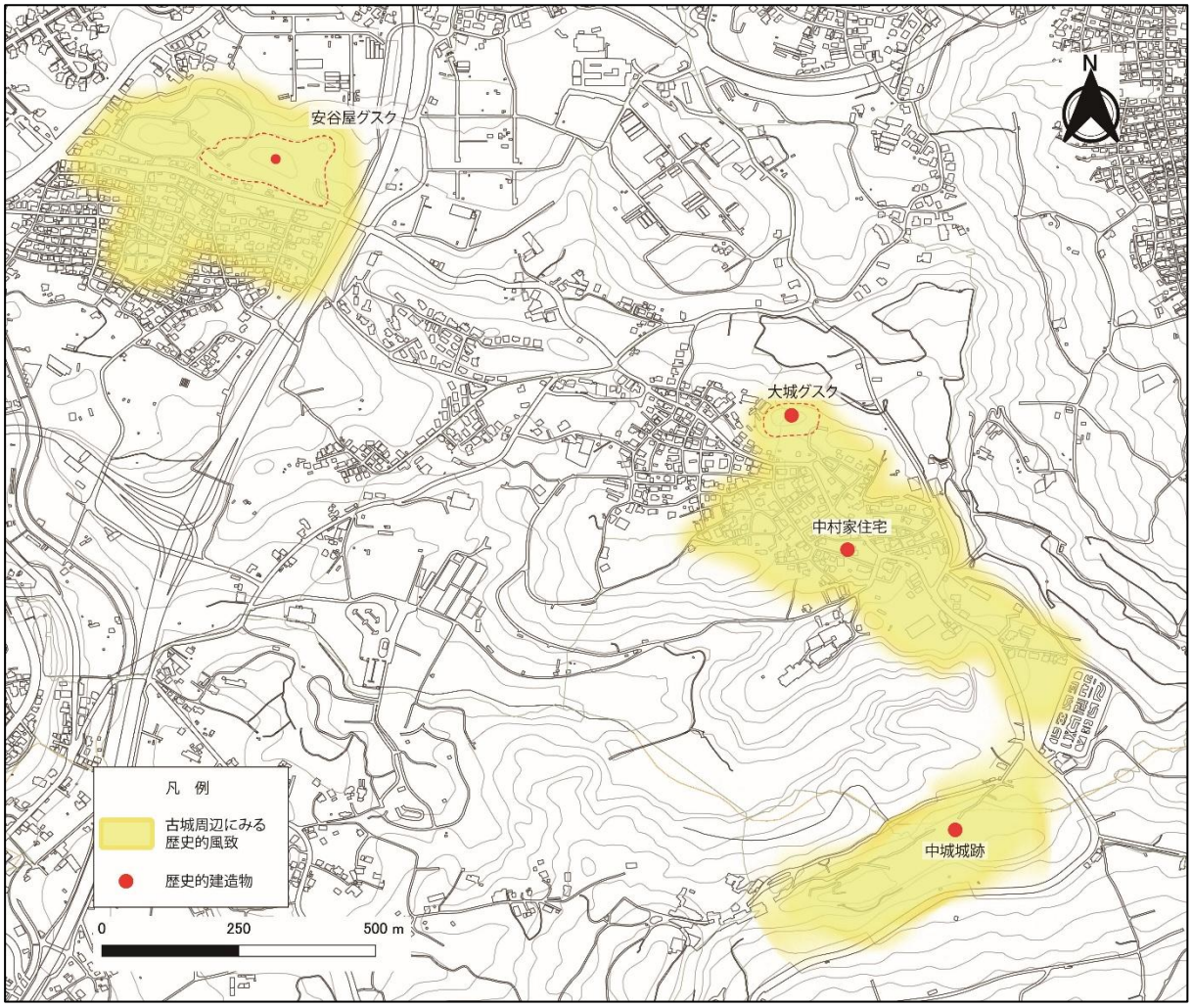
安谷屋地域では、戦後に村全域で教育隣組の呼びかけにより行われるようになった「歩け歩け運動」を、地域住民の健康づくりと交流を目的とした周遊活動として発展させ、現在も取り組んでいる。

安谷屋グスク麓の伝統的集落景観の中で営まれる住民の活動が地域固有の歴史的風致を形成している。

◆古城周辺の周遊にみる歴史的風致図



おわりに

北中城村南部には、中城城跡・大城グスク・安谷屋グスクなど、丘陵地に築かれたグスクが複数分布している。これらのグスクにおいて、祭祀のほか、文化財の維持・保全、修景・緑化推進、周辺景観に親しむ周遊活動などが今日まで継承されている。グスクを背景に展開される地域住民の多様な営みが、北中城村固有の風情を醸し出し、独自の歴史的風致を形成している。

◆古城周辺にみる歴史的風致